

京都芸術大学紀要二十八号の発行にあたって

二〇二四年度の京都芸術大学紀要(Genesis 28)には、作品研究報告、研究論文、研究ノート、調査報告という通例の区分に加えて、批評・評論、エッセイという新しい区分が加わり、従来の紀要にも増して多彩な内容となっている。今号にも読み応えのある論文、報告が多く、ひとつひとつの論考に目を通した。

その中の一編、植木豊氏が執筆した研究ノートに少し触れてみたい。これは、子どもたちが科学に親しむ機会を増やすことを目的に企画された大規模な教育イベントに、本学の学生たち六三名がワークショップのサポートスタッフとして参加した記録である。このイベントは科学教育とアートの多様な関係性が伺える展示で構成されており、植木氏は今回の取り組みを手掛かりに、「科学を分かりやすく伝えるためのアート」と「科学をベースにしたアート」という2つの研究の方向性を示唆している。本論考はそのための探索的調査で、その内容自体興味深いが、私が注目したのはイベント終了後に行った十数項目の質問に対する学生たちの回答だった。そこからは、学生たちがこのイベントから何を学び、どんな新しい気づきがあったのか、が活き活きと伝わってくる。

本学は毎年、学内外での多数の実践プロジェクトを芸術教育の一環として実施しているが、それらが学生たちにとってどのような教育効果をもつのかを、芸術教育のあり方という観点から検証し、研究としてまとめる試みはあまり行われてこなかったように思う。地域の伝統行事の復興や、環境問題への取り組みなど、本学の教員、学生が長年にわたり継続的に取り組んでいる教育プロジェクトは数多い。こうしたプロジェクトのもつ芸術教育としての意義に関する研究は、単年度で行うことも可能だが、字数制限のある学会誌ではなく、大学紀要という場であれば数年間の取り組みを俯瞰する形でまとめることもできる。

本学教員の活動成果発表の場としての紀要が、今後も新たな試みを取り入れ、研究論集としてさらに充実したものになることを期待している。

二〇二四年九月二〇日

京都芸術大学学長 吉川左紀子